



どなたでも
ご参加ください！

参加無料
申込不要
直接ご来場
ください

令和7年度 大東市 提案公募委託事業

『いのち』についての 話をしよう

ACP
そして

～ 緩和ケア と 人生の最終章 フォーラム ～

2026 2月11日 水・祝 14:00-16:30

会場：大東市立市民会館キラリエホール
大阪府大東市曙町4-6



1 パネルトーク

- 高濱 祐也 氏 Yuya Takahama
社会福祉法人慶生会 / 認定理学療法士
- 神田 栄美子 氏 Emiko Kanda
藍野大学 看護学部 看護学科 助教
- 樋田 小百合 氏 Sayuri Toida
四條畷学園大学 看護学部 看護学科 老年看護学 教授
- 田中 こづえ 氏 Kozue Tanaka
野崎徳洲会病院 緩和ケアチーム / 副薬局長

司会: けい

2 ディスカッション

パネラー全員に登壇いただき、ご来場の皆さんを交えて「より良い最期」や「緩和ケア」についてディスカッションを行いたいと考えております。



大切な『いのち』を感じるBOOKギャラリー

限りある大切な「いのち」について「物語」が心に優しく伝えてくれる。そんな小説や絵本を展示、紹介いたします。

【監修】小辻 昌平 氏 Shohei Kotsuji
直木三十五記念館 事務局長

同時開催

お問合せ 電話：080-3136-7183 メール：pcp.center.minami@gmail.com

主催：PCPセンター 後援：大東市社会福祉協議会

高濱 祐也 氏 Yuya Takahama
社会福祉法人慶生会 / 認定理学療法士

長年訪問看護事業所の運営に携わり、地域の在宅医療に関わってこられました。人に寄り添い、医療ケアのみならず、ご本人の想いや願いを叶えたいと日々奔走されています。夢は、お年寄りが幸せなまちにすることとが。



樋田 小百合 氏 Sayuri Toida
四條畷学園大学 看護学部 看護学科 老年看護学 教授

病院勤務時代に患者の壮絶な最期を見てこれ疑問を抱かれたことから研究の道へ進まれました。介護施設や病院で従事する人の看取りケアに対する思いや不安、また尊厳死についても、多く調査研究されています。



神田 栄美子 氏 Emiko Kanda
藍野大学 看護学部 看護学科 助教

ご自身のお母様のお看取りで辛い経験をされたことから看護師になり、訪問看護や病棟勤務を経て、昨年大学教員とされました。誰もが自分らしく生きていくため「どう生きたいか」を語り合う「Zibuがふえ」を主宰。



田中 こずえ 氏 Kozue Tanaka
野崎徳洲会病院 緩和ケアチーム / 副業局長

病院内の緩和ケアチームに配属され、以来様々な状態の患者さんに寄り添ってこられました。痛みを取ることで穏やかになる患者さんを見てこれ、緩和ケアの重要性を強く感じられるようになったそうです。



主催者からのメッセージ



●きっかけ●
終末期医療のイベントは、今回で六回目となります。きっかけは、十一年前に経験した祖父の看取りです。医療も介護も知識のなかった私は、それまで老いや死について考えたことはありませんでした。祖父が病院で衰えていく中「ごはんが食べたい」「家に帰りたい」という望みを叶えることの難しさを体験しました。九三歳にして、苦しく希望の持てない生活がやってきたのです。最終的には人工呼吸器に繋がれた状態で家に連れて帰り、最期は家で亡くなりましたが、半年間辛い思いをさせてしまったことになりました。この国の医療は変わらなれないと思い、出来事を手記にして自費出版しました。また、市民の意識を高める目的でイベントを始めたのが二〇一八年です。

●環境●
祖父が亡くなった十一年前に比べ、終末期の環境は大きく変わってきました。超高齢社会、多死社会となり、必然的に政治も経済も注目し、必須となる医療や介護の問題に、どういうインフラで応えるかという知恵が渦巻き、様々な業界に変化が生じている渦中が今と病院内では追いつかない。延命措置は苦しい上に費用がかかる。となれば在宅での看取りに舵を切ったのが数年前。私の祖父同様、最期は自宅と望む声をよく聞きます。反面、家族にとつては大変と不安がつきまとうのも事実で、近年は病院と家に加えて施設での看取りも増えているようです。

●ACP●
日本では二〇一八年に表れたACP（アドバンス・ケア・プランニング）という言葉。人生の最終段階に、どこで誰と過ごし、どんな治療を受けたいのかなどを事前に考え、医療者や身近な人と繰り返し話し合うことを言います。が、その始まりは一九九〇年代のアメリカに巻き起こった過度な延命治療に対する疑問の声です。日本でも、延命措置に対して事前指示書が必要となり、その後、医療以外の望みも含めて家族や医療者と価値観を共有するプロセスが重要となり、二〇一八年「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」の改定で、ACPが提唱され、健康な時から話してききました。

●知って、考えた。●
祖父が亡くなった二〇一四年には無かった概念が、祖母の頃二〇一九年には「ちゃん」とあり、私は祖母を家で介護し、穏やかに看取ることができました。知っているといるということが、家族の最期の過ごし方がこんなに違うのかと、思い唖然となりました。誰かが最期まで希望を持って生きられる地域社会にするためには、様々なものが変わる必要があると思います。医療や行政、経済的なアプローチも必要でしょう。そして、私たち市民の意識が変わることも重要。一市民である私に何が出来るわけではありませんが、考えることはできる。考えてみることにこそ人として生まれた醍醐味のように私は思います。そして、私一人ではできなくとも多くの方の協力を得てイベントを開催し、「おかげで良い看取りができた」と報告してくれる人も現れました。

●緩和ケア●
最近気になってくるキーワードが「緩和ケア」です。回復の見込みがない状態のとき、治療を終えて、苦痛を和らげるケアをすることを言います。命を諦めると考えると、本人や家族にとっては勇気のいる決断だと思います。ですが、苦痛に耐えるのではなく、痛みを取り除いて「最期の瞬間まで自分を生ききる」ためのケアが緩和ケアではないでしょうか。イギリスの医師シリー・ソングは、苦痛には四つあると提唱しました。疼痛などの「身体的苦痛」、落ち込みなどの「精神的苦痛」、仕事ができないうつなどの「社会的苦痛」、そして、生きる意味への疑問や死の恐怖といった「スピリチュアルな苦痛」です。緩和ケアは、様々な職種がその人に応じて四つの苦痛を取り除くことを理想としています。

●物語で伝わる「いのち」のこと●
私が祖父の終末期に関わる際、参考となる書籍を探しました。それが第三回目のイベントで上映した映画に繋がりました。医療や介護の本といえは医師が執筆した専門書や、闘病経験者の闘病記を想起するかもしれないが、難しいことが書かれていないのでは？辛くて読めないんじゃないかな？と、躊躇される方もいるかもしれません。そうした方にお勧めしたいのが小説や絵本です。物語は、事実ではないけれど、読む人に様々な知識や感情を優しく伝えてくれます。指南書ではなく、あくまでも物語を追体験して自分ならどうするだろうといった思考を巡らせる機会を得られます。自分や大切な人の「いのち」について自然と考えるきっかけづくりになるような小説と絵本を会場後方に展示紹介いたします。